

(平成9年1月8日発行)

会報

第4号

北海道高等学校世界史研究会
事務局 北海道札幌平岸高等学校
062 札幌市豊平区平岸5条18丁目
TEL 011-812-2010
FAX 011-812-2049

世界史研究会の大きな役割

北海道高等学校世界史研究会
会長 丹 暢 夫
(北海道旭川東高等学校校長)

平成8年2月、豊浜トンネル崩壊事故が起こり、テレビにくぎづけになっているさなか、翌々日の12日、司馬遼太郎氏の突然の訃報という別の衝撃が走りました。

この日から丁度半年前の7年8月、政府主催行事として『戦後50年の集い』が計画され、司馬氏の講演が中心イベントとして予定されていたものの、紆余曲折の末、連立与党内部の意見対立から御破算になってしまったのは、かえすがえすも残念なことでありました。日本という国の姿かたちや未来について、もっと多くの発言をして欲しかったと思います。幻となったこの司馬講演が、何を語りたかったのか、今は知るすべもないのですが、未来を担う青年には勇気を、また、歴史教育の一端を担う私たちには、新しい出発点を示唆してくれるものであったらうかなどと勝手に推察をしています。

世界では、エチオピアのラミダス猿人の発見、日本では、函館空港遺跡群、青森県三内丸山遺跡など、縄文文化の新しい研究をはじめとして、歴史を書き換えるような数多くの新事実が続々と出ています。一方では、近現代史に関する歴史常識の非常識というような表現で、教科書・歴史教育への批判や疑問が注目を集めている状況があると、何か落ち着きの悪い気分になったり、もどかしさを感じたりもします。

12月13日に行政改革委員会が橋本首相に提出した規制緩和策の意見書によれば、教育分野でも「学校選択の弾力化」「教科書検定の透明化・教科書採択制度の改善」などがあげられ、大きな話題になっています。

21世紀を迎えようとするこの時代は、確実に変革に向かって走り出しているのではないかと思います。一元的な思考から、多元的な思考へ、固定的枠組みから弾力的枠組みへと、今まさに自分自身の主体的な努力が求められています。

自由に語り合える雰囲気をもった「世界史研究会」の役割は、ますます重要になってきていますので、多数の皆さまの参加を期待しております。

第 27 回 研究大会 記録

日 時 平成 8 年 8 月 10 日 (土)
会 場 北海道札幌平岸高等学校

講 演 橋場 弦 氏 (大阪外国語大学比較文化研究科 助教授)
研究発表 飯田 一三 氏 (北海道天塩高等学校教諭)
橋本 達也 氏 (北海道札幌南高等学校教諭)
司 会 今井 一吉 氏 (北海道美唄高等学校教諭)
宮浦 俊明 氏 (北海道札幌新川高等学校教諭)
記 録 斎藤 修 氏 (北海道寿都高等学校教諭)
中川 雅史 氏 (北海道札幌西陵高等学校教諭)

講 演

「ギリシア民主政—— 評価と現実」

大阪外国語大学
助教授 橋場 弦氏

今回は、非常に根深い問題——大学における学問研究の社会的な意義は何なのか、という問題を取り上げた。大学で研究されている歴史学、学問としての歴史学と、高校で教えている世界史というもの——もちろん両者は密接に関係しているわけであるが、それぞれが目指す方向が微妙に食い違うところがある。高等学校の先生方が、日々苦心なさることが、我々大学で教える側にとってもかなり重要になってくる。残念ながら大学での学問自体のあり方というもの、こういった切実な教育現場のニーズに答えているか、というと必ずしもそうではない。高校世界史の延長が、大学で教えている歴史学とはいかないわけである。大学での研究は、それ自体の論理、目的というのものが、それを突き詰めて行くと限りなく専門が細分化、分極化していく。

19世紀の学問は別だが、いわゆる歴史の全体像、ましてや世界史の全体像については、今日の学問水準ではなかなか見えて来ない。高校の世界史を詳しくしていけば、大学で教える学問につながるというわけではなく、高校で教わった世界史像というものが、実は少なくとも、幾つもの歴史像のうちの "one of them" にすぎないということを否応なく大学に入って知らされるわけである。私も西洋史概説を教えているが、その最初に言わざるをえない。「世界史の教科書は、一種のトリックである」と。そして「その証拠に、場合によっては日本史の教科書の方が厚く、それはおかしいことではないか。日本という一つの民族のせいぜい有史に入ってから1500年くらいの歴史の記述と全世界の数千年にわたる多くの民族の歴史を書いたものが同じ厚さであるのは、どこかおかしくないのか。」と質問する。それは、「およそ不可能なことを一冊の世界史の教科書に押し込めるといって、不可能なことを可能にしている一種のトリックがある。」と言わざるをえない。それも必要なトリックである。決してそれが悪いというわけではない。全く何も世界の歴史のことを常識として知らないよりは、トリックでもよいから少しでも興味を持って勉強して欲しい

というのが、たぶん高校の先生方の問題関心ではないかと思われる。それに対して大学での学問というものは、分極しており、専門分化しており、その社会的有用性というものが果してどうなのかというものが、疑問になる。差し当たって大学での研究というものは、人文科学系はそうだが、何に役立つというものではない。逆に言うと妙に役に立つ歴史学というものは、ある意味で怖いものがある。戦前の皇国史観、つい最近まであった共産圏の体制側の歴史学などである。どちらにしても政治にとって都合のよい歴史というものは、それは凶器になる。いずれにしても高校での世界史、大学での専門での歴史学は、微妙にベクトルが違う。それゆえ、ここで私が自分の専門領域をただそのまま話してもしょうがないわけで、大変迷ったとはいえ、与えられた責務を行わなければいけないので、本日は教育の現場で役立つのではないかと思われるようなことを日頃私が研究している領域から幾つかトピックを拾って、何か皆さんのヒントになるようなことをお話できればと思う。

私自身は、古代ギリシア史を、アテネ史の直接民主政（デモクラシー）のシステムを問題にしようとして10年以上勉強してきている。西欧のヨーロッパ流の民主主義を辿るということに興味があり、源流を辿っていくと古代ギリシアの直接民主政に行きあたる。

高校時代に、「いわゆるデモクラシーという英語の語源は、ギリシア語のデモクラティア（民衆の支配）であり、単に言葉の語源というだけでなく、システム自体もギリシアのポリスの国家にデモクラシーの御先祖様があるんだ。」ということから新鮮な驚きを感じた覚えがある。そのようなことがあり、そのようなテーマを選んだ。しかし、我が国では、昔から社会経済史が盛んであるが、国家の制度史というものは意外なほど研究されていない。私は、役人とか政治家の公的な責任、これを一般市民が追

求したり弾劾するというシステムを、「公職者弾劾制度」と名付けて、勉強している。

西欧民主政治の起源をギリシアに求めるということは乱暴ではないか、という議論もある。今日の民主政治、代議制・間接民主政とギリシアの民主政とは非常に違いがある。古代ギリシアのポリスの民主政というのは、西欧民主政治の歴史の中でも一つのエキスをすぎないのだという意見もある。しかし、教科書などでも西欧民主政治の始まりというのは、ジョン＝ロック、ジャン＝ジャック＝ルソーからというのが、政経とかの教科書のスタンダードになっている。私の考え方では、民主主義というのを思想というのではなくて、一種の文化という行動様式としてとらえるならば、根源はもっと根深いところに求めることができるのではないだろうか。例えば、議会政治のお手本となるイギリス議会政治のルーツを辿るならば、中世以来のイングランドの代議制にそのルーツがある。大陸諸国の議会制民主主義にしてもやはり、身分制議会と無関係ではない。一方アイスランドやスイスには、中世以来直接民主政の伝統が根強く残っている。スイスなどでは今でも州自治の単位で一種の民会が開かれている。このようにヨーロッパでは様々な民主政治の伝統文化がいくつもの流れになって今日に流れこんでいる。決して政治理論、原理からだけ出発したのではないと思われる。だからギリシアの民主政治というのも一つの民主的伝統文化と位置づけることができるのではないかと思う。事実ヨーロッパの知識人が、近代以来、「デモクラシー」というものをイメージする時は、必ずギリシアとの比較・対象にかかわっていた。それは民主政治を罵倒する側、擁護する側にとっても同じである。民主主義という言葉は「デモクラック、デモクラシー」というギリシア語を用いてしか表現できない。他の言葉に置き換えられない。そういう意味では、ギリシアの直接民主政のルーツというのは、

今日の西欧民主主義のあり方を考える意味でもヒントになる。それはけっしてギリシアをお手本にするというわけではなく、現代を自己相対化するためにギリシアを一種の比較の対象にするということである。以上が古代民主政治を扱うということに対する意義ではないかと私が考えていることである。

古代史については、高校の教育現場ではお荷物扱いになっているのではないだろうか。近現代をやる時間がない。世界史Aのようなリアクションは当然のことと思う。ただ、教育という立場を離れて考えると別だ。例えば「ヨーロッパ人」という、文化的に共有するものを持つ人々がいる。ヨーロッパ人のアイデンティティー、歴史的に形成されたヨーロッパ人らしさというものを考えると、例えばポール＝ヴァレリーという人は、ヨーロッパ人をヨーロッパ人たらしめている要素は3つあるという。一つはローマ文明の遺産、もう一つはキリスト教、もう一つはギリシア文明——この三つがヨーロッパ人をヨーロッパ人たらしめているアイデンティティーであるという。ローマにしても、キリスト教にしても、ギリシアにしても、どれ一つとっても西欧古代の所産であるということは大変重要なことであると思う。人間の人格（パーソナリティー）に「三つ子の魂」があり、その人の幼少時期にかなりの重要な部分が形成されるが、似たようなことが、民族とかエスニックグループだとか歴史的に形成された集団にも言えるのではないか。彼らの心の奥深くに刻まれたものこそが、彼らのアイデンティティーを歴史的に規定する要因になりうる。近代になって初めて、ある集団のアイデンティティーが形成されたのではない。むしろ彼らの経験が古ければ古いほど、それは彼らのメンタリティーに深く重い意味を占めるのではないかと思う。だからデモクラシーを文化的な伝統として、しかも我々日本人にとっては異文化の伝統

の上に形成されたものとして理解する。その上で古代とか中世を無視することは決してできないというのが私の考えである。アテネの民主政のシステム、運営のやり方に焦点を絞って、一種の行動様式としてのアテネ民主政治をみていきたいと思う。

アテネの民主政といっても大変複雑である。アテネは、紀元前508年のクレイステネスの改革でその基礎がおかれ、それから100年ぐらいかけてどんどん成熟していく。ふつう462年のエフィアルテスの改革で制度的な完成をみたと言われている。それが322年の民主政の廃止まで続くと言われているが、その間アテネ民主政の要の地位に置かれた機関が「民会」である。それは成年男子市民全員が集まる市民総会であり、軍事、外交、財政など政策全般がここで決定され、民主政の要であった。ローマにも「民会」はあったが、重要な機能は果さず、「元老院」が何でも牛耳っていた。アテネにおいては少なくとも、やはり名実ともに「民会」がアテネの国家を引っ張っていったといえる。これに焦点を当ててみたいと思う。

民会については、特に今世紀に入って重要な考古学的な発見が発掘され、その様子が明らかになってきている。西方からアテネ市内を見下ろす小高い丘の上に「プニュクス」（古代の民会議場の跡）があった。これが発掘され遺跡として残っている。今日ある遺跡は紀元前345年以降のプニュクス第Ⅲ期と言われるもので、今日ではコンサートの会場としても使うようだ。広さとしては、5500㎡。収容人員はといえば、一人がそこに座るにはどうしても0.4㎡のスペースが必要なので、0.4㎡で割れば13,800人ぐらい入っただろうと言われている。ここで民会が行われた。

民会はだいたい月に4回、定例会は年に10回くらいしか開かれぬ。民会に提案される議案というものは、あらかじめ開会の5日前くらいにアゴラ（公共施設が集まっ

ている広場)の掲示板に公示されて、あらかじめ議題を討議できる。アゴラは市場だったので、露店が出ていたようだ。開会の前日になるとアゴラから民会(プニクスの丘)に至る坂道にあった露店を取っ払って、議場をぐるりと衝立みたいなもので囲んだようだ。市民権を持たない人を排除するためである。入場口を一か所に限って、そこで市民権を喪失した人、奴隷、外国人、年齢制限に引っ掛かる人を入口で排除した。女性は例えアテネ市民の家に生まれたとしても一切参政権は認められていない。民会に集まった彼らは、長くて1日いっぱい議論した。ギリシアの夏はものすごく暑い。民会は日の出のころに始まる。午前中には終わったと思われる。午後になると、今でもそうだが、店等は閉まってしまう。古代においても同じようだったと考えられる。長期戦になることを覚悟する用心深い人などは食べ物(タマネギ、パン、ニンニクとか)を持って民会に入ったようだ。

今日でも政治に無関心層がいるが、当局は、警備員に赤土を塗ったロープの端を持たせ民会に追い上げ、赤土が着物についた場合、民会手当がもらえなくなるので、人々は、赤土がつかないように逃げまどって、民会場に追い立てられていったと言われている。

会議は、まず宗教的儀礼から始まる。若い豚が一匹屠殺されて、それを持った係が民会場をぐるっと一周し、血を滴らせる。血を滴らせた内側は聖別された空間であって、その中に入るようにと伝令、触役が出席者を導入する。当時において政治と宗教は重要な関係であった。ギリシア人という合理的な考え方をする民族と思われがちだが、事実そうなのだが、なおかつ大変信心深い人々であったのも確かだ。清めをすることは、聖別された空間の中では神々を裏切るような欺瞞は許されないという意味があったと考えられる。その後、伝令(声の大きい人で、議事次第を読み上げる)が、

出席者に成り代わって神々への祈りと呪いの文句を読み上げる。市民が最善の判断を下すようにとか、敵方に通報していたり、賄賂をもらったりして民会での提案をする輩には、神罰が下るように祈った。審議中に雷がなるとか雨が降るとか稲妻が走るなどがあると、人々は民会をたたんで帰る。露店ができないということもあるが、「下手な議論にゼウスの神が怒っているお告げ」と考えられていたようだ。そういう大変面白い習慣があった。

一連の宗教儀礼のあとで審議が始まる。民会は立法機関なので、伝令の、「発言を求める者」の呼びかけに応じて、人々は「私に発言させろ」と演壇に登った。演壇は高さ3mぐらいで、私も登ってみたが、この上に立つと気持ちが良い。まして6千人なり、1万人なりの人が集まるといい気分だったろうなと思える。それが自分の提案に耳を傾けて歓呼の声をもって賛同してくれるとなると誰でも一度は演壇に登ってみたいと思うのは自然の理である。ただし、愚にもつかない演説をしたり、演壇上でけしからん振る舞いをするというような人物が現れたりしたら、聴衆から情け容赦なくヤジが飛ぶ。「降りよ。降りよ。」と聴衆が叫ぶ。そうなる以前に議長が、下手な演説者を係員に命じて演壇から引きずり降ろす。引きずり降ろし役の警備員(弓を持った国有奴隷)が控えていた。有名なエピソードなのだが、プラトンの兄にグラウコンという人物がいた。弟に比して、ぱっとしない人物だったようで、まだ20才にもならないのに演壇に上がりたがり、愚にもつかない演説をして引きずり降ろされていた。何度もこれを繰り返して、人々の物笑いの種となっていた。誰も止められず、ソクラテスが最後にやってきて、「おまえは政治家になりたがっているようだが、アテネの国家予算を知っているのか。アテネの軍事力はどれだけあるのか言ってみろ。」と聞き、論ずという話である。現在、

「民会決議」というものが大量に発見されて、重要な一次史料となっている。人の背丈ぐらいで幅は50cmぐらいの大理石に刻んであり、今日アクロポリス博物館の入口のところに大変きれいに残っている。5世紀の末あたりの碑文が残っていて読める。

以上、民会での手続き、運営について説明してきた。現在、「民主主義」と呼ばれている一つの源流が、プニクスの民会議場に象徴される、こうしたアテネの民主政に求められるということは、おそらく誰しもが否定できないことだと思う。民主政治、デモクラシーというスタイルをギリシア人が初めて発見して、意識化して、それから制度化したという世界的な意義は計り知れない。彼らは民会で重要なことをすべて議決し、役人をくじ引きで選び、任期1年のローテーションで、一つの役職に特定の個人が長期間就かないようし、権力の細分化をはかった。よく言われるのに「アテネはこうして支配者と被支配者との区別をつけていた」というのがある。それはあながち誇張ではない。アテネ民主政というのは、専制君主による支配でもないし、少数の貴族や官僚が政権を独占している寡頭政治でもない。言わば人類史上初めて現れたタイプの支配体制であったといえる。

このように世界史上稀にみるほど徹底的な直接民主政を実現したアテネだが、この歴史的評価ということになると複雑になる。特に19世紀以来ヨーロッパ、アメリカではその評価は両極に分かれる。一つはアテネ民主政を理想視する立場——いわゆるヨーロッパ的な自由主義のお手本としてみる立場である。他方は、これを無定形な民衆がその時その時の群衆心理に支配されて感情的に民会によって何でも決めてしまう悪しき衆愚政（オクロクラシー）の手本だとしてみる立場である。そのような立場はたいていの場合、フランス革命に対して批判的な立場をもっていて、反革命思想の持ち主が同時にアテネ民主政をも批判するとい

う関係になっているようだ。そこまでいなくても、アテネ民主政が5世紀の前半ぐらいまで、例えばペリクレスの支配に至るまでは、大変理想的な支配を行っていた。パルテノン神殿などの文化的な輝かしい達成を行ったのだけれども、ペロポネソス戦争を境にしてから墮落したのだ。デマゴグ、煽動政治家に操られて、これが無責任な民衆による衆愚政へ変質して行って、衰えて没落していったのだ。そういう見方は今日でも非常に根強いところがある。ブルクハルトの『ギリシア文化史』にもそのような考えが表れている。その中に、例えば「ペロポネソス戦争の間にアテネの民主政治はデマゴグの下で衆愚政治となり、ついにスパルタに屈伏した。」という記述がよくある。これは私が高校時代に覚えた記憶のある大変懐かしい一節だ。しかしながら、理想視する、衆愚政治扱いする、どちらの立場も裏側には民主主義というものをめぐるイデオロギーがあり、どちらも古代の姿を的確に記述するものとは言いがたいと言える。

確かに理想視するには、我々は多くの現実を目にしすぎた。奴隷制の問題もそうだし、女性が全然参政権を与えられていない点、基本的人権ということを彼らはまったく知らない。それは当たり前の話である。奴隷は物を言う道具であり、人間ではない。アテネ民主政においては、場合によって追い剥ぎや誘拐の犯人が現行犯で捕まった際にその犯人がその場で白状した場合、裁判なしでその場で首を切られる。あれだけ裁判制度が民主的に発達したアテネですら裁判なしの処刑というものが行われていたのである。ある意味では無邪気にアテネ民主政を理想視するということはもちろん今日では許されない。かといってアテネ民主政が、気まぐれな群衆心理によって支配された衆愚政だったのか、と言うとこれについては我々は慎重に臨まねばならない。確かに今日の基準を当てはめるとアテネ民主政

は大変幼稚なところが目につく。ところが、歴史上の評価というのは何でもそうだが、現在の高見から昔を、過去を断罪するということはあまり意味がない。あるいは、古代の民主政を無闇に現在に引きつけて評価してもあまり意味がない。

しかしながら、アテネ民主政を例え部分的にせよ「衆愚政」として評価する態度は、差し当たって次のような重大な反省を迫られると思われる。第一に衆愚政という概念の問題である。これを最初に使い出したのはポリュビオスだが、以来衆愚政という言葉は、民主政に対する何らかの偏った価値観を含んだ概念だった。レッテルのようなもので、一種人を罵倒するような道具であると思われる。それを学問の用語にして用いるのはどういうことか。事実、今日のアテネ民主政の研究においては、「オクログラシー（衆愚政）」という言葉を使わない。第二にソクラテスにせよ、プラトンにせよ、アテネ民主政の同世代に生きた哲学者たちは、多かれ少なかれ既存のアテネ民主政のシステムに対して批判的な社会階層に属していた。ソクラテスは微妙だが、プラトンは名門中の名門、大金持ちであり、民主政というのは金持ちほど不都合になるようにできている。金持ちからお金を絞りとって貧乏人に分配するシステムなので、上流の階層出身の哲学者達がアテネ民主政について批判的なことを書き残すのは、ある意味で当たり前のことだ。アテネ民主政についての古典史料のかなりの部分は、そういった知識人による。それはアテネ民主政を支えた一般大衆の意見を反映していない。むしろ反対になるわけで、我々は哲学者ないしは、知識人たちがアテネ民主政に対して浴びせかけた非難の言葉を、一方的に鵜呑みにすることはできない。翻って民主政の立場を謳って書かれた政治理論というものは一つも残っていない。プラトンにしてもアリストテレスにしてもほとんどの政治学者たちは、アテネ民主政治に対しては批判

的だ。特にプラトンがそうだ。プラトンは、愛する師ソクラテスが民主裁判により死刑になり、ある意味で民主政治を憎悪している。こんな衆愚どもを相手してもしょうがない、ということになって、シチリア島に渡って哲人政治の理想を行ったりする。そして失敗したりする。この弟子であるアリストテレスもプラトンほどではないが、すべてが良くないというわけではないが、ある形態における民主政治というのは良くないものだと書いている。ある社会階層を代表する意見ゆえに一種偏った判断だといえる。

余談になるが、一般にアテネ民主政が衆愚政に墮落したというのは、ペロポネソス戦争の27年間のことをさして言う場合が多いが、確かに431年からの27年間は衆愚政と非難されても仕方がないような出来事がいくつも起きた。和平の提案を何度も民衆たちが蹴ってしまう。当時あって民主主義というのは、交戦主義であり、民主派というのは「戦争をやれ」ということである。平和と民主主義というのは、この当時相反するものだ。むしろ金持ちは戦争を止めて欲しいと思っていた——戦費は自分たちで払うわけだから。そのような中で群衆たちは和平提案を蹴ってしまう。あるいは有能な指導者たちを一時の感情の昂りによって8人同時に裁判にかけて、そのうちの6人を一度に全部首を切ってしまう。その翌日から民衆たちは「あんなことはするのではなかった。」と言って後悔する。オクログラシーと非難されてもしょうがない事態がたくさん起こったが、ペロポネソス戦争という27年間というのは、ある意味でアテネにとって非常に特異な時代であったといえる。人々がある意味で極限状況に置かれた時代である。——ペロポネソス戦争においては、ペリクレスが、城壁の外の田園地帯を全部、敵の蹂躪にまかせる。田園地帯に住んでいる人を全部城壁の中に移り住ませる、という背水の陣をひく。城壁の中

はそんなに広くはないので、3万なり何万なりの人がぎゅうぎゅう詰めに集まる。衛生状態も悪く、まもなく疫病が流行りだし、バタバタと人が死んでいく。かつてペストではないか、と言われていたが、今日の研究では天然痘ではないかと思われている。こういう状況についてトゥキディデスは、「人々がバタバタと周りに死んでいく。そうすると人々はあきれた振る舞いに及ぶ。とても普通では考えられない行動をとるようになった。」と書いている。そういう極限状況に置かれている人間は何をしでかすかわからない。そういう27年間を一般化の材料に使うのは果してどうかという問題になる。

事実、ペロポネソス戦争にアテネが負け、一等国の地位から転がり二等国になる。19世紀ぐらいの考え方では、没落していったのだという考え方が、支配的だった。今日の考え方では、アテネはペロポネソス戦争中のことを悔いて、4世紀に入るとある意味で自立的な整った民主政になっていった。むしろ安定化していった。経済的にはむしろ4世紀の方が繁栄したと言われる。だから、ペロポネソス戦争の20数年間をほかの何十年間にまで演繹し、普遍して一般化するということはできないと思われるわけである。

衆愚政がよくないという第3の理由としては、今世紀に入ってから哲学者や知識人が書いた古典史料以外のいろんな新しい史料が発掘ないしは発見され、これによってアテネ民主政のイメージがだいぶ変更されたということがあげられる。特に1931年以降アゴラとかプニクススの丘などがアメリカ古典学会の活躍によって発掘されて、いろんな考古学史料が現れている。そういった考古学的史料によって、古典史料からではわからないいろんなイメージがどんどん見えてきた。ブルクハルトなど19世紀の歴史家たちが全然予測しえなかった事態なのである。そういった諸研究の成果からみる

と、どうもアテネがペロポネソス戦争に負けた以降の4世紀というのは、没落の1世紀というのではなく、成熟・完成の1世紀であつたろうと言われている。事実、民主主義のシステムは、4世紀に入ってからたいへん緻密化していくと言える。そういうわけで実際のアテネ民主政というのは、抽象度の高い政治理論とか、哲学的論理から演繹されるというのでは決してない。その点我が国の戦後民主主義における順応過程とは根本的に異なる。我が国がとった民主主義というのは外来なので、仕方なしにロックやルソーから教えざるをえないということになっている。アテネ民主政の場合は違う。どこかよそからもたらされた外来のアイデアではなく、もっと土臭いものではなかったのかと私は想像している。理論からの演繹というのではなく、試行錯誤の積み重ねによって獲得された経験の集成、それがアテネ民主政という一個の歴史的現実ではなかったのだろうか。であればこそ、その中にはペロポネソス戦争の荒廃期にしばしば起こったような衆愚政と非難されるものもあっても仕方がない失敗もあったと思われる。試行錯誤だから、その経験のプロセスを先に述べた新しい認識の成果をもとに丹念に解きあかしていくのが、私の関心事である。以上がギリシア民主政の歴史的評価ということに関する私の考えである。

アテネ民主政を新しく評価する、新たに読み取るという課題にどうやってアプローチしたらよいか。これは大きな問題だ。総合的にいくつもの視角からこの問題にアプローチしなければならない。アテネ民主政を支えていた市民たちの意識を探る1つの切り口として、もう1つの重要な民主政の機関である裁判所、民衆裁判所を取り上げて、その運営の方法をみていきたいと思う。この民衆裁判所の運営の仕方というのは、アリストテレスの『アテナイ人の国制』という一等史料に極めて詳しく書かれている。その中にアテネ民主政を支えた名

もない市民たちの意識を探し出す手掛かりになるようなものがあるように思われる。それで民衆裁判所の運営のやり方をみてみたい。

アテネの裁判では、民衆裁判所以外にいくつもの裁判所があった。どの裁判機関の運営についても言えることは、司法の民衆参加、アマチュアリズムである。検察官とか弁護士というプロフェッショナルは、一切いない。刑事告発したいと思ったら、その人が民衆法廷において検事の役をする。弁護士はおらず、訴えられた側の本人ないしは、親族、友人が弁護にたつ。お金目的で弁護士みたいなことをすると一種の収賄行為とみなされて、死刑になる。告発する側、訴追する側、弁護する側、それはアマチュアである。そして裁く側、裁判する側もアマチュアである。アテネ市民は、職権主義というものを厳しく排除し、少数の専門家、司法の官僚といった存在を認めない。むしろ多数の市民が集まって、多数で裁けば、それだけ公平な裁判に近づくと考えていた。裁く側のアマチュアリズムが、如実に現れているのが民衆裁判所（ヘリアイア）なわけである。以下、民衆裁判所の運営手続きをアリストテレスの『アテナイ人の国制』を主たる史料としてみていきたい。

アリストテレスは、なかなか読み解き方が難しく、読み解かれたところによると次のような方針でやっていたらしい。裁判官、一応陪審員という。これが本当のど素人で、5世紀においてはくじ引きで選ばれていたようだ。任期1年で6千人の定員があったようだ。4世紀になると希望者であれば誰でも終身陪審員の地位につけるようになった。6千人という枠が外される。6千人～1万人という人員が陪審員としての資格をもっていた。この6千人が全員集まって裁判するわけでもない。当時にあつては、今日における刑事と民事に相当する公訴と私訴の2通りのジャンルがあった。刑事にあたる公訴の訴訟では1法廷で501人、民事

にあたる訴訟では201人。なぜ1人という端数が入るかといえば、判決がフィフティーフィフティーに分かれた場合に、最後の1人がキャスティングボードを握るためだと説明されているが、仮に250対250ということがあっても、それは被告人に有利な判決が下るといふ風にアリストテレスなんかは考えている。それゆえに1人という端数はよくわからない部分である。そういう構成で小法廷を形成して、この500人の法廷を、千人で裁く、2千人で裁くというように重大性に応じて陪審員の数を増やしていったといわれている。どうも5世紀においては、1つの法廷の5百人のメンバーシップも、それを担当する役人も、全部1年間変わらなかつたらしい。そうすると予めどの法廷で裁かれるか、わかってしまうので買収が横行したらしい。それで、いたちごっこであるが、4世紀に入ってこの5百人を極めて神経質な抽選手続きで何度も繰り返して不正がないように抽選を行っていた。アリストテレスの『アテナイ人の国制』によると、陪審員全体を仮に6千人としておくと、それが当日裁判所の周りに集まる。例えばその裁判の1日において5百人の法廷が6つ必要だったとすると、その当日必要な陪審員は、5百×6で3千人必要になり、残りの3千人をふるい落とす必要がある。そこでまず第1回の抽選を行い、その裁判にその日参加するかどうか分かれる。その抽選に、抽籤器（クレロテリオン）という道具を使う。ごく単純なもので、福引の抽籤器のみみたいなものである。陪審員は1人1人が名札（ピナキオン）——初め青銅製でのち木製。だいたい2×11cmぐらいで、陪審員の名前と所属区が書かれている——を持っていて、この名札を抽籤器に無作為に差し込んでいく。差し込みが終わったら、そこからサイコロを出す。白と黒によって3千人をふるい落とす。その後、どの事件に当たらせるか抽選する。当日になって法廷を決めていくので、裁判直

前しかわからない仕組みになっている。何度も何度も抽選し、不正を防ぐ。仮に裁判官を買収しようとして、5百人にお金を与えるとすると、確率的に考えても、その5百人が自分の事件を担当するのは非常に少ないと考えられるし、6千人全員を買収するなら莫大な額になる。貴族や金持ちの市民も作偽的なことができず、民主政治の徹底といえる。裁判役人は、司会をするだけで、訴訟当事者が呼ばれ、弁護を始めるところから裁判が始まる。法廷用水時計によって弁論時間が計られ、訴訟の内容によって弁論の時間等が決められる。こういう事件には水何涸という風に決められていた。6.4%でだいたい6分とされ、訓練を積んだ弁士は、そのことがわかっていた。採決については、無記名、秘密投票によって投票され、過半数によって採決された。手近な史料としては『ソクラテスの弁明』がある。当時としては、一等級の罪として処刑されたそのソクラテスの被告としての弁明であり、裁判制度をみる上で非常に重要なものである。ソクラテスは自分の弁護でとうとうと無罪を主張し、一回目の有罪、無罪を決める採決では220対280という僅差での有罪という状況であった。しかし、その後量刑を決めるための求刑が行われた。原告側としては、当然死刑を求刑したわけだが、この裁判においては被告も刑を求めることができる。ソクラテスの場合は、

「私は国家に対して罪を犯したことはない。私はむしろ国家のために行動したのだ。一生涯、国家が私を雇ってくれ。」と語った。このことを聞いた陪審員は、逆上した。2回目の投票では、140対360という圧倒的な票数で死刑となった。こういう民衆裁判をみて、プラトンは職権主義の方がよいと判断している。

民衆裁判の原理というは、1つは、少数の者が権力を握るのはよくないと判断していたということである。買収されたらどうするのか、ということで、多数ならばある

種、希釈されると判断していたようだ。もう1つは、先に抽出するというものである。アテネ市民は、この民衆裁判についてアマチュアリズムを信頼していた。陪審員、法廷雑務係の係員も素人。つまり、古代ギリシアでは、1つの職を専門的に追求するのは市民らしくないと考えていた。あらゆる方面にバランスよくその能力を発揮すべきだと考えていたわけで、それが市民としての理想であると思っていた。

アテネ民主政が、素人政治と悪口をいわれるが、我々が考える素人とは違う。生産などは奴隷が行った。市民は政治、軍事、裁判にあずかるポリスの公務に従事するアマチュアともいえるが、ポリスのプロともいえ、それゆえに、近代的なブルジョアジーとは違うとも言える。

民主政は、制度ではなく、生活様式のことと考えられる。市民はほどほどの万能人でなければならない。ポリス市民は、自分の家を経営しており、人に使われるのは奴隷である。貧しいと言われているソクラテスでさえ石工であって、自分で経営しており、奴隷を買えないくらい貧しい、というだけである。そして、戦時では戦士として戦うため、平時より体を鍛えていた。精神と肉体の分離という考えがあるわけではなく、すべてにわたってバランスよく人間を成長させるということ、それがギリシア的なヒューマニズムといえる。

研究発表 1

「20世紀における 宣伝」

天塩高等学校

飯田一三

1. はじめに

「大衆操作とは、情報の送り手が何らかの意図を持って、情報の受け手を操ろうとすることである」。現代は「情報化社会」であり、そこでは「メディア」がキーワードとなっている。「メディア」は一方向的・直接的情報を大衆に流すことによって世論を操作する危険性を持っている。時の権力者はしばしば自分の目的に即し、都合の良い情報を作り出し大衆を操作した。20世紀、大衆を自分の陣営に引き込むために、このメディアの重要性を強く感じ、実際に活用して大衆を操作したのがヒトラーのナチス＝ドイツであった。今回はこのナチスが行った宣伝（プロパガンダ・大衆操作）について述べたい。

2. ナチス＝ドイツ（ヒトラー）の宣伝

高校の世界史でナチスのヒトラーをとらえる場合、ユダヤ人の虐殺などの例をあげ、「ヒトラー＝狂人」ととらえがちである。しかしながらナチスによるユダヤ人虐殺は、ヒトラーが狂人だったというだけでは説明できない。ユダヤ人虐殺の背後には、周到な計画があり、大衆操作をうまく利用していった側面もあると思われる。またヒトラーを単なる狂人と扱い、歴史上彼が何故この時期のドイツに登場したのかということを含んでは無視したような解釈はできない。彼を単なる狂人ととらえるのではなく、むしろその時代の申し子ととらえた方がよいのではないかという見方もある。ナチス（ヒ

トラー）による宣伝（プロパガンダ・大衆操作）とはどのようなものであったのか。

現在ではアメリカを中心にプロパガンダや大衆操作に関する研究が進んでいる。まず第一に、プロパガンダには7つの方策があるといわれている。それは「中傷」（特定の対象にレッテルを貼り、それを攻撃する事で憎悪や恐怖の感情に訴える）、「軽蔑」（軽蔑されるものと結びつけてそれを否定する）、「きらめく一般化」（軽蔑の逆）、「証言」（尊敬される人物の言葉を引用し自分を尊敬させる）、「一般化」

（権力者が大衆と同じ立場に立っていることを強調する）、「カード切り」（都合の良いことを強調し、都合の悪いことを隠す）、「大勢に便乗」（みんなが支持しているという支持を拡大させる）である。ヒトラーは演説を通してこの種の手法を有効に使い、支持を拡大するとともに強大な権力を掌握していった。

第二に、政治学者のミリアムによれば、プロパガンダの機能とは、「権力を飾りたて、大衆を情緒的・感情的な状態が優先する状態におき、権力に服従」させ、「権力を正当化するための理由付けの機能を果たす」と定義している。こうした定義をナチスに当てはめてみると、まず権力を飾りたてるための方策として、古代ゲルマン民族の壮大な建造物を建て、旗・装飾品・制服に機能性よりも芸術性を重視したりした。また、過去の英雄とヒトラーを同一視させるような映画の作成、行進や演説・音楽を伴った大衆的な示威行動を積極的に行った。更に権力の正当化として、ナチスは国民に対する教育を重視した。そしてこの教育を利用し、権力を擁護する国民、ナチのシンパを作っていた。

第三に、プロパガンダの方法として、「不安」による操作があげられる。大衆は自分だけで解決できない不安状況に追い込まれると、他の情報に依存する傾向があるといわれる。ナチス政権は第一次世界大戦

後のドイツの不安状況の下で、それを利用するかたちで大衆を操作し権力を掌握していった。

それでは、ナチス（ヒトラー）によるプロパガンダの特徴とは何か。その最大のポイントはヒトラーの演説に見ることができる。ヒトラーの演説は「四角が円であることも証明できるように」、すなわち不可能を可能にするような演説ということができ、一般に大衆は固定観念を持っており、大衆の考え方を一新させることは難しい。そこでヒトラーは周到に演説を繰り返し繰り返し行い、同じことばを何度も繰り返すことによって大衆の心理を読み、大衆が持つ固定観念を徐々に弱め、その考え方を変えていくことに成功したのである。

次にナチスが大衆操作に利用したメディアについて述べたい。メディアとは伝統的な社会機関（教会・学校・家庭など）による情報を飛び越え、直接大衆に情報を与える手段である。ナチスが政権をとる前に主として利用したメディアはポスターであった。ナチスのポスターは巧みに大衆を引き込むような手法が見られた。また大衆の支持を得るためにとった手法に「党大会」があげられる。ナチスの党大会は権力を飾りたてるための様々な効果的な演出がなされており、政治的アピールをクローズアップすることに力点が置かれた。

ナチスが勢力をのぼし、政権を奪取した後には、ラジオが大衆操作の手段として用いられた。当時ラジオは開発されたばかりの機械で、高価なものであったが、ナチスはこれを大量生産して価格を下げ、各家庭・公共施設、職場に普及させていったのである。ラジオというメディアは耳でしか聞くことのできないものであり、映像として眼で見ることができない反面、情緒的に訴求しやすい特質を持っている。ナチスはそうした特質をうまく利用してヒトラーの演説やそれに熱狂する群衆の声、そして番組にマッチした音楽をフルに活用し群衆を操

作していった。ナチスが大衆操作に利用したメディアにはそのほかに映画があげられる。映画は、受け手に対して最大限の可能性を秘めるメディアであり、大衆に何かを思いこませる最大の武器として利用された。しかしナチスは自分たちの宣伝映画を作るのではなく、一見して宣伝映画とはわからない、娯楽とマッチした映画を制作した。たとえば昔の歴史的な英雄とヒトラーを同一視させる映画や極悪非道のユダヤ人が登場する映画を制作したのである。こうして知らず知らずのうちにヒトラーを英雄視したり「ユダヤ人=悪人」と言ったイメージを持たせる巧妙な大衆操作を行うことに成功した。

3. 「下」（大衆）からみたナチスの大衆操作

ではナチスがいったいどうして大衆からこのように熱狂的な支持をされることになったのか。ナチスがドイツの混乱の中から支持されて行ったのは、単に政党による政策を打ち出し、それを実行して行ったからではない。大衆からの支持を得ることができるか否かは、大衆運動と言う民衆の自由な意志に基づく活動をいかにうまく組織していくかにかかっている。ナチスはどのように大衆運動を組織し、支持されていったのか。

ナチスは、ドイツのシンボル・祝日・神話・記念碑・美術・芸術・小説・音楽・演劇といったありとあらゆる文化に対してわからないような形で統制を加え、知らず知らずのうちに大衆を運動に参加させ、それによってナチスを正当化してしまうような状況を醸し出していったのである。しかし、当時のドイツにはナチスに対抗する二つの勢力が存在していた。それは共産党と社会民主党である。ところが共産党は不況によって多くの労働者が失業状態にあり、ストによる抵抗手段がとりにくい状態にあった。また労働組合の強力な支持下にあった社会

民主党はナチの台頭に対し、具体的な方策は何も採らなかった。こうした二つの左翼勢力はその後警察とナチの突撃隊によって合法と非合法の両面から弾圧され次第に勢力を弱めていった。労働組合組織も幹部がナチス黨員にすげ替えられていき、徐々に権利を奪われていったのである。

4. 終わりに

以上のようなナチスの政策に対して、ナチス政権崩壊後のドイツ国民はどのように考えているか。1951年の世論調査の結果によると、1933～39年のナチス政権時代のドイツがもっともよい時代だったと考える人がもっとも多いという結果が残っている。またこれと関連してヒトラーを英雄視・神格化する「ヒトラー神話」も存在する。つまりナチスの数々の悪行は無能な部下がやったことと考える傾向である。このように戦後になってからもナチスやヒトラーに対する支持が根強いという背景には、多くの国民が望んでいた失業対策が非常にうまく行ったことや、感情に左右されやすい若者の熱狂的な支持を得ることができたことなどがあげられる。見方を変えれば、ナチスによる上からの操作が大衆の要望にマッチしていたという側面があるからではないかと思われる。

では現代社会ではナチスのような大衆操作が可能なのか。現代社会はマスコミが一手に情報を提供し、第4の権力と呼ばれる大きな力を持っている。過去のナチスが行ったような国家権力による一元的なメディア統制はほとんど不可能な状態にあるものの、それによる大衆操作の危険性がないとはいえない状況にあると思われる。

(質疑応答)

Q. ナチスが情報操作の手段としてラジオを安く大量に提供したということであるが、資料にある聴取者(1933年の250万人から1942年の1600万人への増加)の算定基準と全人口に対する割合はどうであったか。ま

た当時のラジオの値段はどのくらいで一般的な労働者の賃金と比較してどうであったのか。

(南富良野高校, 古屋)

A. 細かいデータ及び根拠となる文献の出版についてははっきり確認していないが、聴取者の数が1933年から1945年にかけて大幅に増加しているということに重大な意味があると思う。

Q. 発表で見せてもらった「映像の20世紀」のビデオを実際授業で使っているのか。使っていなければ是非使うべきではないか。

(釧路北陽高校, 窪田)

A. 世界史の授業でヒトラーの時代まで進むことができず、このビデオは使ったことはない。

Q. プロパガンダは20世紀に独特なものではなく、古代以来、時の権力者が利用していたのではないか。また何故当時のドイツの国民がナチの宣伝に引き込まれてしまったのか。もし社会情勢が違えばナチスのプロパガンダがあのようにうまく行かなかったのではないか。当時の社会的背景とも関連させながら研究された方がもっとよかったかもしれないと思う。

(釧路北陽高校, 窪田)

A. ナポレオンやカエサルも自分の業績をたたえる記念碑などの建設で大衆を操作していったことは事実である。当時のドイツ国民がナチスを支持していった背景には当時の社会情勢が大きく関係していると思われる。

Q. アメリカ、イタリアなど当時の周辺諸外国でもナチスと似た大衆操作が行われていたと思うが、それとの比較でナチスのプロパガンダの特殊性とは何であると思うか。

(札幌稲西高校, 中村)

A. ドイツのプロパガンダも周辺諸国のプロパガンダと共通点があると思うが、一般にナチスのプロパガンダが悪いイメージがあるのに対し、アメリカなどのプロパガンダについては悪いイメージが無い。これはナチスの行ったユダヤ人の虐殺に代表される

悪いイメージが影響しているように思われる。

Q. アメリカのルーズベルトやイギリスのチャーチルもプロパガンダによる大衆操作を行っているが、ナチスとの比較で言えば、彼らの宣伝には嘘の宣伝がほとんど無く、客観的な宣伝であったといえるのではないか。ただだからといってナチスの宣伝がすべて嘘であると単純にはいえないであろう。今回の発表はそのナチスによる宣伝の実体を明らかにする発表であったと思う。

(札幌東商業高校、味村)

研究発表 2

「世界史への導入～ 五感を使って異文化 に接する」 —素人による素人の ための授業—

札幌南高等学校
橋本達也

1. はじめに

私が社会科の教員になって最初に考えたことは、自分が高校時代「世界史」が嫌いであったということであった。幼い頃より歴史自体は大変好きであったが、高校2年になっていよいよ世界史を習うことになり、その内容を知って愕然とした記憶が残っている。現在の生徒もよく言うことであるが、世界史の授業に対するイメージをまとめると、「時間と場所が非常に激しく行き交い、どこの地域の何をやっているのかわかりにくい。前の授業と今日の授業のどことどこがどのようにつながっているのか把握しにくい。いろいろなテクニカルタームやカタカナの人名がでてきて、結局人名や国名を覚えるだけで、その人物の具体的な生き様がなかなか見えてこない。」等のマイナス面が多い。さらには「ある国が成立したかと思うとすぐ滅んでしまう」等の感想を持

った。以上のように、世界史の授業には納得のいかない点が多く、歴史に対する興味をそがれてしまったような感じがする。おそらく現在の生徒も同様に感じていることであろう。そこで、どうすれば世界史の授業を興味深いものにできるだろうかと考えるようになった。私自身世界史を学問的に勉強した経験は無く、全くの素人である。しかしその素人ということを利用して、自分以上の素人である生徒が積極的に参加できるような世界史の授業を模索してみた。今回の報告はその授業実践についてのものである。

2. 現時点での素朴な取り組み

現代は情報化社会である。生徒は世界に関わるある国やある人物、そしてあることごとについて興味を持っていることが1つや2つはあるようである。私が毎年行っているアンケートでもそれなりに世界に関わることに興味を持っているという結果が表れている。しかしながら、世界に対して興味があるが世界史には興味をもてないというのが実状である。このギャップを埋めるのにはどうしたらよいのであろうか。

このことを考えた場合、生徒が持っている興味から出発することが重要ではないかと思う。また、これから歴史学を学ぶ生徒に対して、生徒が授業に参加するという観点にたった場合、科学的な学問としての歴史学から出発するのではなく、歴史の原点とも言うべき「物語としての世界史」から授業に入っていったほうがベターではないか考える。つまり「〇〇年に〇〇という人物が〇〇という国をつくり、〇〇の戦いで勝った」ということよりも、ある人物の生き様を物語を通して知り、その人物に興味を持ち、それに関係する人々に興味を持つことが大事なのではないか。歴史上の人物に興味を持ち、好きになることができれば、歴史に対する興味も増すのではないかと考えるのである。

これは単に歴史に対する興味ばかりではなく、「社会科・地理歴史科・公民科」という教科に対する興味をどのように持たせるかということにも関係している。人の顔の覚えてこない授業ほどつまらないものはない。そこでテストにでてくる固有名詞がわからなくても、人の顔がイメージとしてでてくるような授業、つまり「物語」を導入とする授業をめざすようになったのである。

いわゆる文章で書かれた「物語」を多用する授業は、限られた時間のなかでは限界がある。私が日常的に行う「物語」を導入とする授業は、現物の「物」を使って、その「物に語らせる」という方法である。具体的には導入として視聴覚教材を中心に使い、物から何かをイメージし、最終的には世界史を構成する一部分とどのように関連しているかということ把握できるようにしているのである。その際の留意点としては、視聴覚教材はあくまでも導入部分に限定して利用するということと、歴史＝覚えなければならぬという感覚を払拭させること、理屈ではなく生徒にダイレクトに伝わることなどである。

社会科といえはすぐ「暗記科目」であるというイメージが強く、社会科のテストは100点満点で、そこから減点されていくマイナスイメージの発想が強い。しかし考え方を変えれば、「わからないのが当たり前」であり、そこからいくつわかることができたのかというプラス発想はできないだろうか。そして「どれだけのことを覚えたのか」ということを重視するのではなく、「わからないことが原点であり当然である」「わからないことを許せる」という状況を作り出せば、わかる喜びを生徒に持たせることができるのではないかと考えるのである。

3. 授業における具体的な実践例

(1) インドの授業の導入

私自身インドという国が好きで、2度ほど旅行したことがある。その旅行の経験もあってインドの授業にはこだわりを持つ面もある。授業の導入ではまず自分自身インド綿の民族衣装を着て授業に行き、授業の最初にお香を焚くことにしている。そして「なぜインドではお香を焚くのか」という発問から自由に生徒に発言させ、議論させるようにしている。時にはいろいろな意見が登場し、議論が盛り上がることもしばしばである。

そうした中で「お香を焚かなければならぬほどの悪臭が漂っている現状」を説明するようにしている。またインドの音楽も導入として用いている。用いる音楽はインドの伝統的な民族音楽に限らず、現在の流行音楽も聞かせるようにしている。その場合、一見現在のインドの流行音楽は西洋の影響を受けていて伝統的な音楽とは似ても似つかぬようであるが、基本的なリズムの中に伝統的な音楽との共通性を示すということで生徒への興味付けを試みることもしている。

以上のような動機付けのあとでいよいよ本題のインドについて、スライドを用いながら説明へと入っていく。スライドではまずカルカッタの町中で移した一枚の写真を見せ、そこに写っている人力車に乗ったシーク教徒の親子と人力車を引く車夫の肌の色の違いなどからカースト制度とインド社会の状況について説明する。また道路で営業する床屋の写真からジャーティの話に関連させていくようにしている。

さらに北から南へとそこに住む人々を連続的に見せることにより肌の色の変化（南へ行くほど黒い）に気づかせ、インドの多民族性と結びつけて説明するようにしている。また流行音楽のカセットのジャケットの写真などを利用して、インドの俳優は白い肌の持ち主が多く、白い肌の持ち主が優位にたっているというインド社会に存在する肌の色による差別についても触れてみた。

このように言葉と理屈によって説明するのではなく、写真に写し出された実体の中からなぜインド人がこのような独特な社会をつかっていったのかという問題に関連づけて説明するようにしている。さらに旅行中に経験したり耳にしたことなどからインド人の考え方やカースト制度がなぜ無くならないのかといった問題について触れていくようにしている。

(2) 個別実践例

物に語るせる授業の個別実践例として、スライド、ビデオ、写真図版、OHPシートといった「見る」教材を用いた授業、第二に各国の民族音楽やポップスなどといった「聞く」教材を用いた授業、第三にお茶やタコス、タイ米といった「飲食」に関わる教材を用いた授業、第四にお香や香辛料といった「嗅ぐ」教材を用いた授業、そして第五に世界の楽器や紙幣、陶磁器といった「触れる」教材を用いた授業を行っている。具体例をいくつか挙げると以下の通りである。

まず第一に「見る」という教材ではスライドを用いることにしている。ただし単に歴史的建造物を見せるのではなく、日常生活の中から生徒にいろいろと感じてもらうことに心がけている。代表例としては「バラモン教成立以前のインドの原風景」としてのインドの牛のいる風景のスライドなどである。スライドと並んでビデオも利用することがある。ただしビデオも極力5～10分程度に編集して見せるようにしている。というのはビデオを見せると言うよりも、ビデオを一つの出発点としてビデオにでてきた一部の映像から授業を展開していくようにしている。

第二に「聞く」教材として音楽をしばしば利用する。音楽は新しい国や地域に入る導入として利用する機会が多いが、たとえばアメリカ南北戦争前後の社会状況との関連で黒人のブルースを聞かせることもある。

さらに「触れる」教材では、外国の紙幣

を示すことによって、香港ドル紙幣が示す中央銀行が存在しない実態、インドのルピー紙幣が示すインドの多言語性といった実態を生徒に連想させるのに利用している。

4. まとめにかえて

～コロンブスと当時の世界、そしてその後の世界の変化～

最後に3の(2)であげた物に語るせる授業の総合的な実践例として「コロンブスと当時の世界、そしてその後の世界の変化」というテーマの授業を紹介したい。この授業は一年間の世界史の授業の最初の時間に行う場合と、教科書の大航海時代の時に扱う場合がある。ここでは授業開きで行う場合を紹介したい。その際心がけていることは、「これから一年間やる世界史の授業はおもしろいものである」ということを生徒に感じてもらうことである。そしてそのためには生徒を授業に参加させること、単に話を聞くだけではなくいろいろなことをしたり見たり聞いたりするという意識付けをするために様々な工夫が必要であると思う。そこでコロンブスの授業ではまず授業のはじめに「ゆで卵」(触れる教材)を利用して「卵立て」の実践を行う。はじめは自分がやるが、我こそはという生徒に実際卵をたててもらおうようにもしている。そうした実験の中から「コロンブスの卵」の逸話を紹介していく。「コロンブスの卵」と言えば比較的生徒もよく知っている話である。世界史の授業の導入としては授業の最初にこうした話を取り上げることによって、世界史=難しいという先入観を減らすことに役だっているようである。さてこれに続いて授業では「コショウ」を生徒に回して実際においを嗅いだり味あわせたりする(触れ、嗅ぎ、食べる教材)。そしてこれと関連させてヨーロッパの食生活やポルトガルのインド航路開拓の話と結びつけて説明をしていくようにしている。

さらに当時の世界地図(マルティヌスの

世界地図)を指し示し(見る教材),新大陸が描かれていない事実を確認したうえで、コロンブスの話しの導入としている。そしてコロンブスの航海やコロンブスがもともと香辛料の産地であるモルッカ諸島を紹介するビデオを見せ(見る教材),同時に香辛料の現物を生徒に示すことを行う(嗅ぐ教材)。このようにして大航海時代の話をして当時の人々の思いなどについて触れるようにしている。こうした導入はほぼ1時間の授業で終わるように構成している。導入以後の授業ではマヤ文明などの新大陸の状況の話へと進んでいく。マヤ文明に関しては実際に自分が旅行した際のスライドやテレビのビデオをみせる。こうしたものを見せる場合でも単に現地の状況を各国史的に話すだけでなく、ヨーロッパ人が銀山開発のためにインディオを強制労働させた事実や中南米の銀がスペインの王宮の財宝などに見られるように多数ヨーロッパに持ち去られた事実を説明する。またカリブ海に住む人々の写真を見せることによって多数の黒人奴隷がアフリカからつれてこられたことや三角貿易の話などを関連させて説明している。このように各国史ではなく世界史的に、世界の様々な地域がいかに関連しあっているのかということを重視している。

(質疑応答)

Q. 大変おもしろい実践である。最近はやりの社会史の中で取り上げられるものを扱い、また民族衣装を身につけるといったエンターテインメントの要素の方式も取り入れた取り組みであると思う。物語風の歴史を導入として利用することには私も賛成である。しかし私自身は正しい歴史を教えることが教師の仕事であると従来より考えてきていた。そしていかに正しい歴史に近づけるか、そのために導入として具体的なものを使いながら生徒に興味を持たせていくべきであると考えていた。ところが最近歴史にはいろいろな見方があるのではないかと考えるようになってきた。つまりある場所

とある時代の人間が見た歴史と、違う場所と違う時代の人間から見た歴史は違うのではないかということである。たとえばコロンブスの「新大陸発見」はアメリカ大陸に住む人々からとらえると「ヨーロッパ人とインディオの出会い」と見ることができる。

このようにヨーロッパ人から見る見方と新大陸側から見る見方とで歴史を語る叙述が変わってくるのである。この歴史の多様性こそが重要であり、どちらの見方が正しいという観点からではなく、どこからどの時代から見たかによって歴史というものが変わってくるということをいかに生徒に理解させていくことが大切であると思う。つまり自分が今まで見ていた歴史の見方をどのように相対化するかという作業が大切であると思う。橋本先生はこの点でどのような実践を行っているか伺いたい。

(札幌星園高校、佐々木)

A. 私も佐々木先生のご指摘の通りだと思う。歴史にはいろいろな見方があるとよく言われるが、私の実践では西部劇を例に挙げて、白人とインディアンの見方の違いについて紹介するというように、いくつかの例を羅列して紹介するにとどまっている。

Q. 今回の橋本先生の実践は歴史の授業の導入として、生徒への動機付けとして非常に大きな実践であると思う。たとえばコショウ一つから歴史を語るができるという形態の授業はこれからの新しい世界史の授業の一つの指針となるのではないかという印象を受けた。(札幌新川高校、宮浦)

《新刊紹介》

『世界の歴史16 ルネサンスと地中海』
(樺山紘一著 / 中央公論社)

私自身が旧シリーズの『世界の歴史』と出会ったのは教員になってからである。歴

史学を専門に学ばなかった初任者の私に、先輩教師が教材研究の参考にと教えてくれたのがきっかけであったように思う。厚い文庫本にもかかわらず、明日の授業の予習も忘れてむさぼり読んだ記憶がある。勿論いまでも本棚のすぐ手の届くところにある。

さて、同じ出版社から約36年ぶりに、まったく新しい書き下ろしの通史として、昨年11月から『世界の歴史』の刊行が始まった。第1回配本は地中海から見た「ルネサンス」である。フィレンツェを、あるいはイタリアを定点観測しながら、ルネサンスを春夏秋冬の四季としてたどり、やがてはヨーロッパを、そしてアメリカ・アフリカ・アジアを経た大航海の時代をめぐる本書の構成は、実にダイナミックであり、まさに「世界の一体化」を実感させる非常に興味深いものとなっている。また本文の記述は、ときに物語の語り部のように、ときに美術館の学芸員の解説のように、あるいは観光案内をする添乗員のように、まるで同時代の生き証人のように語り進められている。歴史に興味のある読者なら誰でも、その親しみやすい語り口に魅了され、いつしか読みふけてしまうであろう。

旧シリーズとの比較も含めて本書の特徴をいくつか挙げてみたい。

1) まず写真・図版がすべてカラーで大変見やすいという点が本書の大きな特徴である。最近では授業で使用する図録や資料集でも写真を豊富に載せているが、本書では430ページのうち約150枚の写真(絵画資料・図版など)が掲載されており、ビジュアル的に非常に充実している。教科書や図録では見たことがない資料もたくさんあり、本文とともに読者を飽きさせない。

2) 政治・経済史のみならず、社会史・文化史の視点が豊富に盛り込まれている点は、恐らく著者が特に意識しての構成だろう。旧シリーズ以上に庶民から見た「ルネサンス」をうかがい知ることができるのではないか。その中でも第4章の「見えるも

の、見えないもの・・・ルネサンス精神の夏」では、時代の流れに密接に結びつく文化史・技術史について述べられている。授業では単なる固有名詞の羅列に終わりがちな部分ではあるが、その背景が非常にわかりやすく説明されている。また第5章の「くらしのなかのルネサンス」では、数多くの絵画資料を詳細に分析することで当時の風俗や生活観が生々しく再現されている。

3) 各章末ごとに5~6人の人物の話題がテーマに沿って挿入されている。この時代に生きた人々の人生の断片を切り取った「インテルメッツォ」である。ダ・ヴィンチやミケランジェロは言うに及ばず、教科書には載っていない人物(ピコ=デラ=ミランドラなど)も極めて魅力的に描かれている。人名辞典など従来の人物紹介よりもドラマティックな語り口がいい。たいてい人物の肖像も同じページにあるので、プリントして授業でも使用できるのではないか。

4) 第8章の「空間と時間をこえて」の中では、ヨーロッパからはるか彼方の東アジアの日本でルネサンスの花が咲いたことが記されている。近年の研究会等で活発に意見が出されている日本史と世界史の接点について、あるいは日本人の立場から見た世界史像などとの関わりの中で読むと、わずか数ページではあるが大変興味深い。

以上いくつか気のついた点を挙げたが、これ以外にも本書はルネサンスを読み解く上での数多くのヒントを読者に提供されている。「ルネサンス」を地中海世界という巨大な舞台でのドラマ的一幕と考えた著者の挑戦は見事成功したと考えるべきであろう。なお、『世界の歴史』シリーズは全30巻で月1回配本の予定。続刊も楽しみである。

(札幌南陵高校・吉田 徹)

メモリーバンク 世界史問題集

B 6 判 1 9 8 頁 索引付き
定 価 5 6 0 円
発行所 清水書院 =好評発売中=

- ① 北海道高等学校世界史研究会の会員の先生方が中心となって執筆。
- ② 定期考査から受験にまで利用できる用語問題集。
- ③ 一問一答問題で基本用語をマスター、付録のチェックシートを利用して応用問題集に変化。今日の高校生の勉強法を取り入れた画期的な問題集。

<執筆者> 赤 間 幸 人 川 音 強 齋 藤 善 之
武 田 秀 治 田 中 一 秋 華 輪 健 治
真 島 勝 彦 毛 利 禎 晴 吉 嶺 茂 樹

歴史地図によるトレーニングワーク世界史

トレーニングワーク世界史編集委員会 編
B 5 判 8 0 頁 付 別冊解答
定 価 4 5 0 円
発行所 山川出版社 =好評発売中=

- ◎ 北海道高等学校世界史研究会の先生方が中心となって、長年の授業体験にもとづいて作成した、地図を主体としたワークブック。
- ◎ 地図による作業と設問を通して、おのずと世界史の基礎的理解が得られるよう工夫。
- ◎ 38のテーマを設け、作業用地図98点を掲載。
- ◎ 地図使用の入試問題対策としても可能。

<執筆者>

赤間 幸人	中村 和之	味村 隆史	富森 英雄	石川 哲朗
中山 弘章	小山内 嵩	野村 秀明	亀岡 敏克	橋本 卓
菊地 守典	華輪 健治	楡井征四郎	平山 篤夫	窪田 範孝
古木 博	小杉 俊樹	宮浦 俊明	田中 一秋	山口 博
出口 敏智	山田 淳一	鳴海 昌江	川音 強	

充実の世界史・日本史総合資料集

ニュー
ビジュアル版 **新詳世界史図説**

ニュー
ビジュアル版 **新詳日本史図説**

株式会社 浜島書店 名古屋昭和区吹上町2-26 (〒466)
電話 名古屋 (052)733-8040(代表)

大好評 東京法令の世界史資料集

本当は、世界史っておもしろい!



ビジュアル世界史

A5判カラー・200ページ

大図にビジュアル化を図り
写真・イラストが500点



グラフィック世界史A

A5判カラー・142ページ

2冊位A用に対応した
近・現代中心の構成



とうほう

東京法令出版発行

〒330 水戸市中央区北九条西1-1-1 東京法令出版株式会社
TEL 026-221-5411 FAX 026-221-5411

世界が注目!

初の全ヨーロッパ史ついに完成!

各編誌絶賛!
増刷出来

欧州共通教科書

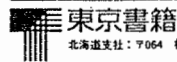
ヨーロッパの歴史

F・ドルーシュ編著/木村尚三郎監訳/花上克己訳

EU新時代に向けてヨーロッパは過去をどのようにとらえ、
未来をどう構築するのか?12か国の歴史家が3年を費やして
共同執筆したヨーロッパ全体の歴史の統一教科書の完成。
西洋史の枠を越えた総合的な視点からの叙述と、
オールカラーの資料国版・地図多数。

A4変型判

6800円
(税別)



東京書館

北海道支社: 7064 札幌市中央区南6条西14-1-5 東響ビル TEL.011-562-5721

第28回研究大会案内

日時 平成9年8月6日(水)

会場 札幌市教育文化会館

[会場が元に戻ります]

講演 河合 安 氏(予定)

(北海道大学文学部助教授)

研究発表 未定(募集中)

世界史研の会報も、3号雑誌のそしりを免れる
ことができました。これも会員諸氏のご協力の
賜物と感謝しております。今後も、紙面の充実
のため、事務局一同、一層の努力を続けていき
たいと思います。どうぞよろしくお願ひ申しあ
げます。(札幌稲西高 中村和之)